２０１３年8月25日号　　静岡民医労　三島支部

静岡民医労勤通大ニュース　基礎コース三島講座

残暑お見舞い申し上げます。さて、「企業のモラルが問われている」（しんぶん赤旗 8/25）という社説がでていました。半導体大手のルネサンスの人員削減です。昨年に目標を大きく上回る７千数千人を早期退職させたばかりで、更に３千数百人を目標に、退職強要をするというものです。「労働者の自由意志を踏みにじり、何度も呼び出して退職を強要するのは明確な権利侵害で違法です。国民のくらしの土台である雇用を乱暴に奪う、企業の違法行為を許すことができない」という主張です。

これも、安倍政権が目指す雇用の流動化のさきがけではないかと。さらに雇用を守るための「雇用調整助成金」、1 千億円を首切りを助長する企業への支援に当てるというもの。あべこべの政策がやられようとしています。わたしたち労働組合も、連帯して、退職強要や不当解雇をやめさせるように運動しましょう。

＜学習会から＞

聞間チューターが「第２章　社会の仕組みとその歴史――第２節　社会の土台にある物質的生産―3. 土台と上部構造」について解説しました。少し逆かのぼって物質的生産と階級社会からやり始めました。

1、**生産力とは何か；**人間が物を作り出すことを労働の**生産力**という。

①人間の**労働**そのもの・・・・生産がオートメーション化されても労働なしには始まらない

②道具や機械等や装置などの**労働手段**です

③天然資源や原料・材料など加工つまり**労働対象**です。

②③の労働手段と労働対象は、生産のための手段を果たすので、合わせて**生産手段**という。

生産力のレベルは、おもに**生産手段の発展度合い、労働(能)力やその組織**によって決まる。

2、**生産関係とは何か；**生産における人と人の関係を**生産関係**という

生産は必ず人と人が結ぶ社会的関係のもとで行なわれる。これに労働組織だけでなく分配・交換・消費の関係も含まれる。

生産手段を持っている人と働く人との関係・・・**生産手段の所有関係**が重要です。

3、**生産手段の所有関係と階級・搾取について**

＊私的所有の社会では、「生産手段を持つグループ」「働くグループ」に分かれる。・・・階級

＊「生産手段を有するグループ」が「働くグループ」から労働の成果を奪い取る。・・・搾取

4、**土台と上部構造について**

生産諸関係は①物質関係にとって必要不可欠で②生産力の到達水準に到達するところ物質関係で③社会の歴史的性格を決める物質的関係である。

生産関係の総体を**「経済構造を社会の土台」**と呼ぶ

この土台に基いて形成される社会の政治的、法的制度・道徳・宗教・芸術・哲学・心理学などの

「社会意識の諸形態を上部構造」と呼びます。

5、**史的唯物論について**（原始共同体・奴隷制・封建制・資本主義的）

史的唯物論は、「社会的存在が意識を決定する」という唯物論の見地を社会科学に当てはめた。人間の意識的行動が関与するにもかかわらず、意識から独立して作用する物質的な社会関係（生産諸関係＝土台）をつかんだ。

こうして、歴史を単なる王朝や権力者達の興亡史でなく、生産力の発展と土台により区分される社会発展の歴史として全体的・発展的にとらえるようになった。

テキストを読みながら討論しました。

質問・疑問・討論

国って誰かが壊さなければダメ？

「国家とは、支配階級が他の諸階級を抑圧するためのもの…権力組織なのです」とうところからの問題意識だと思います。

国民の力で、国家は変えられます。

不破さんの古典講座を引用しましょう

「いざ、社会を本格的に変革するときは、土台の変革を基礎として、上部構造で決着がつけられる」と述べた。「経済学批判・序言」の「物質的変革と人間がこの衝突を意識するようになり、これとたたかって決着をつける場となる」からとり、上部構造（政治）の反作用で行なえるというもの。

しんぶん赤旗 2011 年 6 月 9 日付より

生きづらさの解決のカギは「科学の目」！

科学的社会主義のエッセンス（哲学、経済学、階級闘争論）を学ぼう！

史的唯物論補講・・・歴史のロマンを知る　　2013年8月25日

『資本論』全三部を読む　第七冊　不破哲三著（以下、『全三部作』）より引用し、深めたいと思います。

1、搾取の仕方が社会の支配・隷属の関係を規定するという命題

マルクスは「直接的生産者から剰余労働を汲み出すその搾取の仕方が社会の支配・隷属の関係を規定する」と述べ、この命題を「社会をとらえる根底」にすえました。

そして、「不払いの剰余労働が直接的生産者たちからくみ出されるその独特な経済的形態は、支配・隷属関係――直接に生産そのものから発生し、それがこんどは生産にたして、規定的に反作用するような支配・隷属関係――を規定する」　『資本論』⑬Ｐ1381　『全三部作』より

この命題を、私たちが知っている奴隷制、封建制、資本主義における搾取の独特な「諸形態」にあてはめながら読んでいくと、その重要な意味がより具体的に分かってくる

＜生産手段の所有関係と階級・搾取について＞

＊私的所有の社会では、「生産手段を持つグループ」「働くグループ」に分かれる。・・・階級

＊「生産手段を有するグループ」が「働くグループ」から労働の成果を奪い取る。・・・搾取

奴隷制・・・共同社会から私的所有へ。農耕生産力の発展により剰余生産物が発生した。
生産力のアップと共に、家族で生産できるようになったが、所有は共同のままだった。
ここが、生産力と生産関係（所有関係）の矛盾に他ならない。私有制の誕生。
生産力の向上とともに、農地をめぐる争い(戦争)が起こり、**支配と従属の関係**ができた。

封建制・・・領主が領民(農民)を支配する。農民は領主の土地で耕作をした。**主従関係を確立した。**

資本主義・・働く人々を前近代的な人格的支配と隷属的な関係から開放した。そのためには、人格を持った個人として人権や民主主義を発展させた。しかし、貧困と格差が広がった。つまり、**労働者は資本により支配され、搾取させられて**いる。次の社会の準備をしている。

2、「社会の経済的及び政治的な姿態は、その搾取の「諸形態」の上に築かれる」という命題

「ところで、この経済形態を基礎として、生産関係そのものから発生する経済共同体の全姿容、それと同時に、この共同体の独自の政治的姿態が築かれる」　（同前）『全三部作』より

このふたつの命題を一方では、労働者の様式にまで、他方では国家形態の独自性まで視野を広げ、内容を深めた形で展開している。

「生産諸条件の所有者たちの、直接生産者たちにたいする、直接的関係――この関係のその時々の形態は、当然ながらつねに、労働の仕方・様式の、それゆえまた労働の社会的生産力の一定の発展段階に照応するが―――こそは、そのつど、われわれがそのうちに全社会構造の、それゆえまた主権・従属諸関係の政治的形態の、要するに、その時々の独特な国家形態の最奥の秘密、隠された基礎を見出すところのものである」
同前 P1381～Ｐ1382 まで『全三部作』より

3、テーゼとして図式主義ではいけない

「このことは、同一の経済土台――主要な諸条件から見て同一のもの―――でも、無数の異なる経験的諸事情、すなわち、自然諸条件、人間諸関係、外部から作用する歴史的諸影響などによって、現象的には、無限の変化及びニュアンス――これらは経験的に与えられたの事情の分析によってのみ把握されうる――を呈しうるということをさまたげるものではない」　同前 P1382『全三部作』より

無数の諸事情によって「無限の多様性」を呈するのだから。具体的諸事情で分析する力をしなければならないのだとマルクスはそこまで注意を与えている。（同前）『全三部作』より